

晩鐘成のしおり

晩鐘成略譜① あかつきかねなり。江戸期末に活躍した大坂の絵師、戯作者。寛政五年（万延元年）793（1860年）。墓所は北区大淀中の勝楽寺。また、明治四四（1911）年に木村貞次郎・生田南水建立の晩鐘成翁墓が大阪市浪速区瑞龍寺にある。

晩鐘成のしおり

晩鐘成略譜② 京町堀の醬油醸造業和泉屋に生まれた彼は、若くから狂歌をよく戯作にふけたが、商売にも助んだ。心齋橋通博労町に名物屋を営業するもの、ちに質素儉約令にふれて店は破却。その後も貧賤や辻家などを営んだ。後年、旅先で百姓・探への加担を疑われて投獄され、放免後二十日余りで急死した。享年六十八。

【short interview】「晩鐘成」ってどんな人？

広く豊かな教養をもとに、
幕末大坂で縦横無尽の活躍
肥田 皓三 氏（元関西大学文学部教授）

幕末の頃の大坂でもっとも精力的に著述や出版活動を行った人が晩鐘成です。彼が著述や絵師として関係した本には、地誌や随筆をはじめとして、演劇書の類も多くあり、教訓書、実用書から戯作の滑稽本、断本などと、専門的なものから娯楽本まである多彩さです。その読者も大人の男女はもちろん子ども向けまでと幅も広く、ほんとうに鐘成の活躍ぶりは目を見張るものでした。

もう少し具体的に言うと、鐘成が編述した地誌は、『浪華の賑ひ』『天保山名所図会』をはじめ、『花洛名勝図会』『東山之部』『西国三十三所名所図会』など数多くあります。ただ、この人が在世中は出版されなかった本も結構あって、一番の名著『撰津名所図会大成』は稿本のまま残り、没後久しくしてから「浪速叢書」で出ました。

随筆では、『雲錦随筆』や『晴翁漫筆』。処女作の『近來見聞嘲の苗』は自分が子どもの頃から文化期までの大坂の出来事を記録した好著です。それから、芝居に詳しくった鐘成は、人気役者の中村芝翫の本をい

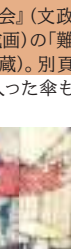
【short interview】「晩鐘成」ってどんな人？

現代人にこそ
理解されるべきマルチな才能
橋爪 節也 氏
（大阪大学総合学術博物館教授・文学研究科教授 兼任）

二十年前、高津の遠眼鏡屋や湯豆腐屋を調べていて『撰津名所図会大成』に出会いました。絵馬堂横の遠眼鏡屋や、老若男女で賑わう湯豆腐屋の様子が、絵や文で描かれていて、作者の晩鐘成の名が記憶に残りました。その後、心齋橋に関する同人誌「新菜箸本撰」の計画を進め、鐘成が心齋橋通博労町に営んだ土産物屋「鹿酒屋」を知りました。これが再びの邂逅です。

鹿酒屋があつたのは南御堂に近い心齋橋筋の博労町です。当時、南北ふたつの御堂さん参詣は大坂観光の人気コースで、あたりに仏具店や土産物屋もあつたらしい。目薬を歯磨き粉ならぬ「目磨き粉」のコピーで売り出した鐘成はアイデアの人。総檜造り高欄を巡らせた店先は王朝趣味がただよ、田麩や味噌とともに「浪華御土産」と銘打った珍品類を販売しました。

鹿酒屋の商品の数々は、鐘成の著作『天保山名所図会』の巻末にある販売目録に並んでいます。滑標の古木を使った工芸品とか法隆寺、東大寺の宝物の複製など、珍品奇品のオンパレード。ひととき目立つのが「天保山名器蓬萊形畧図」です。当時は、山も高くて行楽地として賑わっていた天保山をかたどった亀の置物で、通称が天保亀。怪獣ガメラのフィギュ



『澱川両岸勝景図会』（文政7・1824年、晩鐘成画）の「難波橋納涼」（個人蔵）。別頁には鐘成の印が入った傘も画かれている。



くつも出すなど、演劇書の作者としても大きな仕事を残しています。

彼が三十二歳の時に出した『澱川両岸勝景図会』は、私が一番好きな本です。色刷りがきれいで天満橋上流から肥後橋までの大川沿岸の様子を細かく美しく画いています。『小倉百首類題話』も色刷りの本。『世話千字文教訓絵抄』は子ども向けの教訓書。かと思えば、新町の遊女の本やお酒にまつわる笑話集、さらには生花や茶道の本なども出しています。

それから、鐘成は当時では珍しい愛犬家で、『犬の草紙』や『犬狗養畜伝』を書いていきます。天保六（1835）年、彼は愛犬の皓（しろ）を連れて奈良に向かう途中で賊に遭遇、その際に皓が命を落としたのを悲しんで、天保山に碑を建てています（後に同碑は東大阪市の勸成院に移されました）。

明治になって、大阪の風流壇で活躍した生田南水が、この鐘成のことをたいへん尊敬していました。その彼が明治四三（1910）年に中之島図書館の人文会で「晩鐘成伝」を講演し、その縁で鐘成の子孫に頼まれて難波の瑞龍寺に晩鐘成翁墓の碑を建てています。ちなみに、この碑の台座も犬の形でした。



大阪市浪速区の瑞龍寺にある晩鐘成翁墓の碑。



『天保山名所図会』（天保6・1835）年の巻末に挙げられている鹿廻家の商品目録から、「浪華御土産物雅器畧目」「天保山名器蓬萊形畧図」（個人蔵）。

アみたいなのです（笑）。菓子器や文鎮などご希望の商品に加工すると宣伝します。

鐘成に迫るためこれを粘土で復元してみました。が、広告の絵はツガを心得て、古代の銅器にある文様を刻んだり、いかにもありそうな形に描かれています。真面目と言うか、いちびりと言うか、両者が混濁するところ、鐘成の真骨頂、發揮です。

そもそも鐘成の名の由来は何か。本名が木村明啓。名を反対から読むと「鶏鳴」となり、トッテンコウの鳴き声で夜が明けることから、姓は暁とした。私はそんな想像をしています。また、彼のグラフィカルで風刺的な本は、今の人が見ても面白い。頭の中に最初にビジュアルが浮かんでくるタイプの人でしょう。算術書『算法稽古図会』なども、吉田光由の和算書『塵劫記』などをもとにしますが、ねずみ算では、膨大な数に増えたねずみたちを人間社会に見立てて描きます（笑）。

いろんな意味で、現代的な発想力をもつ人であり、大阪の知識人のひとつのあり方を体現したのが鐘成でしょう。しかし、あまりにも多彩で少々わかりにくかったかもしれない。単純に文学者とか、絵師とか、経営者とか、ひと言で説明できないのです。けれども、現代にこそ理解される人。プロデューサーでもあり、鐘成のマルチな感覚は、これからの時代にこそ評価されるものでしょう。

【short interview】「晩鐘成」ってどんな人？

時代を先取りし
ユーモア溢れる自由人
北川 央 氏（大阪城天守閣 館長）

鐘成の妻おりゅうが切り盛りした「豆茶屋」の引札文は、豆尽くしの内容（大阪城天守閣蔵）。

私が大阪城天守閣の学芸員になったのは1987年のこと。その翌年、初めて展覧会の主担者となったのが「上方のちらし・引札展」でした。これが大好評を博したことで、翌年さらに「同展Ⅱ」を開催しました。この「上方のちらし・引札展Ⅱ」が引札作家家、晩鐘成との出会いでした。

江戸時代、平賀源内や曲亭馬琴、式亭三馬、為永春水といった著名な戯作者が引札の文章を書いていきます。これは今でいうコピーライターの仕事。ところが彼らは江戸の人ばかりで、大坂の人が見当たらない。そこで展覧会の準備にあたり、私は当館にある約800点の引札を調べ、ようやく晩鐘成がいくつもの引札文を書いていることを突き止めたのです。

その文章はリズムカルで面白く、洒落つ気もたつぷり。当館の所蔵品ではありませんが、私の一番のお気に入り「目磨き粉」の引札。人の身体にどこが大切で、どこがそうでないところはないが、人は毎日歯を磨くのに、目は磨かない。おかしいではないか、と訴える内容で、最後に「鹿廻家真秋」とあります。これが鐘成のこと。「鹿廻家」は鐘成が営む名物屋でした。

この店はかなり贅沢な造りだったため、やがて天保の改革でお咎めを受け、破却の憂き目をみます。

それでも、この人はへこたれない。次に天王寺の南平野町で「紅葉ヶ岡美可利家」を開きます。勧進文を回して出資者を募り、その出資者だけ

【short interview】「晩鐘成」ってどんな人？

生きていく知恵を持った才人
しかも色気もある
明尾 圭造 氏
（大阪商業大学公共学部 准教授・商業史博物館 主席学芸員）

晩鐘成は、絵師で戯作者ですが、自家では常に商売をしていました。いわば生業を別にとっていたのはとても重要なことで、その意味で、生きていくことの知恵を持った人だと言えるでしょう。

近世文人画の領域でも、多くの人が自分の生業を持っていました。余技というのではなく、絵を画いているときは画家。でもそれに寄りかからない。そういう感覚を持っている人たちが当時はたくさんいたわけです。鐘成も、土産物屋をしたり、貸席業をしたり、店の内容は変えながらも、臨機応変に生涯を生ききっています。

一方で彼は、自分が持っている知識や学問がどうすればお金になるかがわかっていた人で、勘も鋭い。だから、編集や出版の分野でも、その才能を思い切り発揮することができたのでしょう。彼が書いた地誌の数々は、現在で言うところの「マップル」「るるぶ」的な旅のガイドブックで、同時に「ミーツ」や「ブレイクガイドジャーナル」的な街の情報誌の先がけだとも言えます。『澱川両岸一覽』では、上り船下り船の流域の神社や寺院のことも絵入りで紹介しています。『天保山名所図会』も同様で、天保山は北前船が大坂に入ってくるときの目印の山。こちらも交通の要地であり、物見遊山の場として賑わったところ。この両書を見ても、場所の選び方のセンスがいい。そのマーケット感覚の鋭さには驚かざるをえません。

『澱川両岸一覽』（文久3・1863年、松川半山画）より「大山崎 天王山 観音寺 寶寺」（大阪市立図書館デジタルアーカイブ）。



が利用できる会員制を採用しました。安芸の宮島から購入した小鹿を放し飼いにし、築山をつくり四季の花木を植え、池をめぐらせて、小亭を設ける。小亭に渡した縄には傘がついていて、客はそれを使って注文したり、料金をやり取りしました。のちのリフトのような設備で、先進的なアイデアですが、何よりすごいのは、出資を募ってそのお金で店を経営するという発想でしょう。彼の企画に賛同する株主を募るシステムで、わが国最初の株式会社といわれる坂本龍馬の亀山社中よりも断然早い。

この店は結果的には失敗に終わります。彼は出資者へ詫言するために出家剃髪しますが、名乗った法号はふざけた「味噌汁坊一膳」。そして彼は難波の瑞龍寺門前で「豆茶屋」を始めるのです。この人の生き方を見ていると、どんな状況に陥っても落ち込むことなく、次々と新たな道を切り開き、笑顔で前に進んでいます。時代を先取りする感性とその行動力に、私は大阪人の真髄を見えるような気がします。



晩鐘成 著作等
略年譜 ①

☆長友千代治氏論考（1994年）から晩鐘成編著を中心に抜粋。

◆寛政5（1793）年 1歳
・大坂の上醬油所泉屋太兵衛の子として出生

◆文化11（1814）年 22歳
『近來見聞 嘲の苗』六巻編述

◆文化12（1815）年 23歳
『芝翫節用百戯通』編輯

◆文化13（1816）年 24歳
『芝翫随筆後篇』三巻制作

◆文政2（1819）年 27歳
『絵本舞台扇』二巻二冊編集
『芝翫百人一首玉文庫』の戯編並図

◆文政3（1820）年 28歳
『絵本黄金鱗』七巻七冊制作
『芝翫土産滑稽道中雲助嘲』三巻三冊を編輯並図

◆文政4（1821）年 29歳
『無飽三才図会』の跋文を書く（刊行は弘化3・1846年）

◆文政5（1822）年 30歳
浜松歌国編『神仏豊験記図会』に序並挿絵

◆文政6（1823）年 31歳
『小倉百首類題話』三巻三冊を戯作並図
『春情奇縁 以呂波草紙』五巻五冊編集

◆文政7（1824）年 32歳
『澱川両岸勝景図会』二冊を撰並画
『傍訓 世話千字文』を編輯並並図

◆文政8（1825）年 33歳
『女熊坂朧夜草紙』五巻五冊を戯作並図
『豪傑勲功録』十巻十冊を編述並図
『百家日用 庭訓往来』を編輯並画
『合書童子訓』を編輯並図
『頭書絵入 新童子手習鑑』を編集発行

◆文政9（1826）年 34歳
『持子風花山姥』編輯
『世話千字文教訓絵抄』を編述並図

◆文政10（1827）年 35歳
『鎮西菊池軍記』五巻五冊を著述並図
『万船往来』制作

◆天保2（1831）年 39歳
『新撰訂正 算法稽古図会』を纂校並画
『国恩教諭 漢のさかえ』二巻二冊を著並画

◆天保5（1834）年 42歳
『大全童子往来百家通』編集

◆天保6（1835）年 43歳
『生花早満奈飛』五編一冊編輯
『天保山名所図会』二冊を編述並図
・天保山に愛犬殉難碑をたてる（翌年、同碑を生駒山麓豊浦里の勸成院に移す）

◆天保12（1841）年 49歳
『女諸礼綾錦』編輯
『女諸通用文章』編輯

◆天保13（1842）年 50歳
『和談三細図会初編』を戯作・質素儉約令により鹿廻家が破毀される・天王寺南平野町十丁目に美可利家を開く

晩鐘成のしおり

参考文献①
長友千代治「晩鐘成」『近世上方作家・書肆研究』東京堂出版、1994年
船越政二郎編『晩鐘成研究』『大阪府立図書館紀要』第6号、1970年
『日本隨筆大成第3期2浪華百事談』『摂津名所図会大成』1927年
『日本隨筆大成第3期2浪華百事談』吉川弘文館、1995年
『日本名所風俗図会』一〇大阪の巻、角川書店、1980年

晩鐘成のしおり

参考文献②
橋爪節也「天保広告」『新装本撰』創刊号、2006年
『瀬川兩岸勝景圖會』大阪歴史博物館蔵資料集6、2010年
大阪府立総合資料館『大阪の引け、絵のうた、南蛮文』『東出版』1992年
肥田晴三『上方学藝史叢書』日本書誌学大系五五、青雲書店、1988年
『浪華の賑ひ』の中外書房、1975年



『小倉百首類題話』(個人蔵)の序文末にはこんな人物像も。

【short interview】「晩鐘成」ってどんな人？

煮詰めていけば「大阪」の結晶が抽出できる？

古川 武志 氏（大阪市史料調査会 調査員）

晩鐘成は、一時期、心斎橋通博労町北入西側に住んでいて、そこで田麩、味噌、菓子などのほか「浪華御土産」を扱う土産物店「鹿廻家」を営んでいたそうです。つまりは、もともと商人の血を持っている人。彼の手になる大坂の観光ガイドブック『浪華の賑ひ』や観光マップ「浪華名所独案内」を見ても、名所旧跡だけでなく、大坂の有名商店や名物商品などもあれこれ取り上げて紹介しています。しかも、自分の店をさりげなく画き込んでいることもある(笑)。

当時、外から大坂に来た人たちは、観光や土産物を通じて「大坂とはこんなところだ」という何らかの感覚を得ていたはずです。逆に鐘成自身も、ある意味で自分なりの「大坂」というものを考えて、それを表現していたのかも知れません。鐘成の著した『天保山名所図会』にも、珍品奇品の大坂土産を商っていた鹿廻家の広告を出していて、面白く遊んでいるようにも見えますが、同時にそういうことを通して、彼はある種の「大坂像」を体現していたようにも思えるわけです。

【short interview】「晩鐘成」ってどんな人？

グラフィカルな地図が求められた時代の寵児

島本 多敬 氏（立命館大学文学部 特任助教）

私も編集に関わった、江戸時代に出版された大坂の地図のカタログ『近世刊行大坂図集成』（創元社2015年）には、「浪華名所独案内」がページン違いで3種掲載されています。これは、大坂の名所や名産について載せている地図で、いわば観光案内マップ。3種の地図の構成はほぼ同じなのですが、晩鐘成が描いたとする図が2種あります。これらの地図は、おそらく弘化年間（1844〜48年）頃の出版物だろうと考えられています。版元の石川屋和助の名前があるものとないうがあり、人気の図だったようです。

「浪華名所独案内」と同時代の大坂の地図に「弘化改正大坂細見図」（弘化2・1845年）があり、その改訂版が「慶応改正大阪細見全図完」（慶応元・1865年）ですが、そこには絵師として松川半山の名が記されています。半山と鐘成は一緒に仕事をした間柄。特に、嘉永5（1852）年に鐘成が六十歳を迎えた頃からは本格的にタッグを組み、鐘成は作画を半山に任せ、自らは晴翁と号して文作に専念するようになります。



鹿廻家は総繪造りで、擬宝珠・高欄を巡らせた豪華さで人気を博したが、天保の改革に触れて壊された（『浪華百事談』挿画より）。

『浪華の賑ひ』（安政2・1855年）の「大津湯」の隣に「晩寓居」。

彼は多才で、さまざまなジャンルの本を出しています。江戸時代の大坂には、「知の巨人」と称される木村兼葭堂をはじめ数多くの「町人学者」の系譜がありました。それと同時に晩鐘成がいたわけです。彼は、町人学者というよりも、むしろ近代まで続く「趣味人」に近いような存在でしょう。実は、そういう人たちが文化のバックボーンを支えているのだと私は思っています。そのうえ鐘成はクリエイターとも呼ぶべき人で、表現にもちよつとエスプリが効いている。「うがち」というのか、ものの見方が少し斜め方向からで、どこかクスツと笑わせるところもある。

その生き方にしても、店は天保の改革で潰されたり、経営不振でたたんだり、最後はよくわからないような亡くなり方をします。ただ、それをさどこかで達観しているところがある様子。すべてが「遊び」、とはいっても余芸ではなくて、それも「本気」で楽しんでいる。

大阪の人にとって、彼が残した著作も重要ですが、それ以上に彼の生き方自体が、現在につながるもののように思えます。晩鐘成は良質な大阪を体現している存在。私には、晩鐘成という人物とその生き方を煮詰めていけば、きっと「大阪」の結晶が抽出できるのではないかという気がしています。



【short interview】「晩鐘成」ってどんな人？

名所図会の作者に見る、創作と考証の点と線

田野 登 氏（大阪民俗学研究会代表、「大阪春秋」編集委員）

浜松歌国という人物がいます。晩鐘成よりも二十三歳年長の歌舞伎作者、随筆家で、大坂に関する風俗などの考証随筆を残しています。その歌国と鐘成は、親しい間柄でした。歌国の著述には、文化十三（1816）年刊の『神社仏閣願懸重宝記初篇』という寺社めぐりのガイドブックがありますが、鐘成はこの書の序文を書いており、その中で歌国について「友がきなる浜松のうし」と記しています。「うし」とは「大人」で、師匠、学者への敬称です。

幕末期の名所図会の作者として名を馳せた晩鐘成は、先行する出版物を博搜し、その内容を考証した上で、自らの著述に生かしています。その鐘成が、歌国の書を参考にしたと思しき記述が、鐘成の『摂津名所図会大成』にもあります。

それは、西淀川区の野里住吉社で行われる「野里住吉一夜女祭」についてのことでした。鐘成は同書で、これを「生け贄を供える遺風」だとし、さらには上古に日本武尊がこの付近で殺した邪神の霊を鎮めんとするためか、と解説しています。この種本はおそらく、文化五（1808）年に出た歌国の『摂陽落穂集』と思われます。歌国が「祭神にいけにへを備へる事、古雅なる事」と記していたのを踏まえ、鐘成はさらに当時の史観や尚古趣味的な見方にしたがって、日本紀の神話に由来する神事として解釈



浜松歌国編『神社仏閣願懸重宝記初篇』を改題した『神仏霊験記図会』（文政7・1824年刊、大阪市立図書館デジタルアーカイブ）の目次。同書の序と画は晩鐘成。

したようです。しかし、ボクは古い文献などの分析から、この神事は本来、少女が荒ぶる川の神に生魚を神饌として捧げる頭屋神事だったと推測しています。鐘成の神話による解釈に至っては、荒唐無稽なものです。伝承はこのようにして、時に少しずつ上書きされ創作されていくものです。

もとより、鐘成は教養豊かな考証家でした。『摂津名所図会大成』を読むと、寛政年間に刊行された『摂津名所図会』の記述を引いているところも多々見られます。その際も、きちんとその内容を考証し、時には「後人の作」、故事つけとして次々と斥けもしています。

地誌などの記述を読み解く際には、当時の文人仲間との関係性や先行文献の取り入れ方などにも目配りすることが大切でしょう。今後の晩鐘成研究においては彼の記述を鵜呑みするのではなく、こういう視点に立つての文献批判が必要になってくるとボクは思います。

晩鐘成 著作等略年譜 ②

◆天保14(1843)年 51歳『女操教訓 女大学操鑑』を撰並図画

◆天保15(1844)年 52歳『絵本謎尽し』作成『絵本顔尽し落晰』作成

◆弘化2(1845)年 53歳『浪花繁栄見物独案内』（一枚物）を撰並画

◆弘化3(1846)年 54歳『御迎船木偶図会』に略伝を著述

◆弘化4(1847)年 55歳『金毘羅参詣名所図会』六卷六冊編輯 この頃までに難波村北ノ町に移住

◆弘化5(1848)年 56歳『鐘日奇観』五卷五冊撰集

◆嘉永2(1849)年 57歳『二千年袖鑑』続編編集

◆嘉永3(1850)年 58歳『役者早料理』三冊刊

◆嘉永4(1851)年 59歳『淡路国名所図会』五卷五冊の稿本できあがる『小豆島名所図会』五卷五冊編輯

◆嘉永5(1852)年 60歳・晩鐘成の号を安部貞昌に譲り、鶏鳴舎晴翁を名のる

◆嘉永6(1853)年 61歳『西国三十三所名所図会』八卷十冊編輯

◆嘉永7(1854)年 62歳『古今霊獣譚奇』六卷六冊を輯録『天満宮御神事 御迎船人形図会』を著述

◆安政2(1855)年 63歳『浪華の賑ひ』三編三冊編輯 この頃、『摂津名所図会大成』十三卷十五冊を制作か

◆安政3(1856)年 64歳『古今戯場話』草稿本を作成『正信傳訓読図会』三卷五冊を著述

◆安政4(1857)年 65歳『貞婦賞賛 やまとこころ』を著述

◆安政6(1859)年 67歳『孝養慈愛 柳巷の初花』著述『再撰 花洛名勝図会東山之部』八巻八冊の稿本できると『兼葭堂雑録』五巻五冊編述『晴翁漫筆』五巻五冊を制作

◆万延元(1860)年 68歳・二世晩鐘成死す・10月頃、丹波福知山で百姓一揆に関与したかどで入牢、釈放後20日余りで急死

◆文久元(1861)年 没後1年『瀬川兩岸一覽』四巻四冊刊行

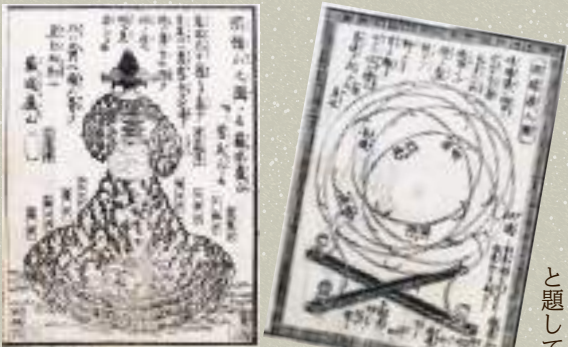
◆文久2(1862)年 没後2年『雲錦隨筆』四巻四冊刊行

◆文久3(1863)年 没後3年『宇治川兩岸一覽』二巻二冊発行

<発行日> 2018年9月8日
<企画・編集> U・CoRoプロジェクト・ワーキング (CEL 弘本由香里 / B-train 橋本 護・小倉昌美)
<発行> 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
<問合せ先> tel.06-6205-3518 (CEL弘本)

若き晩鐘成の洒落っ気が全開した奇書『無飽三財図会（あかんさんざいずえ）』

徹底したパロディを支えるのは驚くべき知の厚さ



『無飽三財図会』（弘化3・1846年刊）の「魂膽義之図」と「須弥山之図」（個人蔵）。

晩鐘成は多くの著作を残していますが、その中でも彼の洒落っ気が全開したともいへべきものが『無飽三財図会』という本です。晩鐘成の作・画で、跋文には文政四（1821）年に記すと書いています。この年は年譜によると彼がまだ二十九歳のとき。タイトルだけでは内容は想像できませんが、いわゆる滑稽本の一冊です。

実はこの本の中味はすべて花街のことです。江戸時代中期に出され、和漢古今の万物を集めて図解した百科事典『和漢三才図会』の徹底的なパロディで、構成もそのまま真似ています。「天の部」から始まって、まずは天象、天文のことが（こじつけだが）詳細に書いてあります。

題名の「無飽」というのは「飽きない」ということで、「三財」は「散財」のこと。「遊客屋夜散財をなす」といえることも飽くことなきがゆえにかく題す」ということで、要するに題材は遊郭で散財する人たちのこと。凡例には「この書は遊客花街に戯れて散財をなすことのあらましを天地人の三才にこじつけたる洒落なり」とあります。

それをことごとく正当な百科事典の形式をとって説明します。例えば、天体の動きを説明する道具「渾天儀」になぞらえて、「魂膽義之図」と題して、「客道」「色道」「極道」「勘道」「横道」などを描きます。「九天之図」では、「九天俗に苦界という客星屋夜こを巡ることおびただし」などと、遊郭に出入する客を星にたとえて表現します。「ほうき星」は化粧の刷毛。「雲」の挿図は屏風に懸けられた帯の柄。ここでは白居易の詩を引いています。

『須弥山之図』では、仏教的な世界を表しているはずの図がよく見ると実は遊女（あかん）の立ち姿。こまでのパロディは、百科事典を読み尽くしてなおかつそれを上回る教養や知識がないととてもできない技でしょう。

一方、こうした本が出されていることから、当時の読者層のあり方もうかがわれます。実際、この時代、大坂の町人の知識水準は現代の我々が考える以上にはるかに高いものでした。まちの中で、知的好奇心旺盛な人たちが好きて学問や研究をしている。そういう人同士の交流も頻繁に行われ、サロンの文化も盛んだった時代でした。